

親同居無配偶者の自己評価*¹

狭間諒多朗

(大阪大学大学院)

【論文要旨】

本稿の目的は親同居無配偶者の自己評価を分析することである。

親と同居する無配偶者には「親に甘えている人々」といったネガティブなイメージがある。しかしながら、当の親同居無配偶者が自分自身をネガティブに捉えているかどうかはまた別問題である。そこで本稿では、親同居無配偶者が自身をどのように評価しているのかを明らかにする。自己評価の指標としては、生活全般の評価を示す生活満足度と階層の上下を示す階層帰属意識を使用する。また、本稿では親同居無配偶者の中にある離家経験の違いにも注目する。離家経験のない親同居無配偶者を「ステイキッズ」、離家経験のある親同居無配偶者を「ブーメランキッズ」とした。

分析の結果、生活満足度については、有配偶者と比べて独立無配偶者と親同居無配偶者の生活満足度が低いことがわかった。一方、階層帰属意識については、有配偶者と比べて親同居無配偶者の階層帰属意識が低くなっているが、この結果はブーメランキッズの階層帰属意識が低いことが原因となっていることがわかった。以上から、親同居未婚者は無配偶者であることで生活満足度を下げ、親元を一度離れた後の戻ってきたということによって階層帰属意識を下げているということができる。

キーワード：親同居無配偶者、生活満足度、階層帰属意識

1. 親同居無配偶者にあるネガティブなイメージ

学卒後もなお、親と同居している無配偶者に対してネガティブなイメージが付与されている。その先駆けとなったのは、山田昌弘によるパラサイト・シングル論であろう(山田 1999)。山田は「学卒後もなお、親と同居し、基礎的生活条件を親に依存している未婚者」(山田 1999: 11)をパラサイト・シングルと定義し、親のすねをかじって豊かな生活を享受する存在として批判的に論じた。以降、学卒後も親と同居し、結婚もしていない人々に対しては、親に甘えて自立しない人々といったネガティブなイメージが定着していった。

他方、以上のイメージに対する反論も盛んに行われた。出生動向基本調査の独身者調査を分析した結果によると、学歴が低いこと、非正規雇用者や無業者であること、収入が低いことが親との同居につながっていることが明らかになっている(岩上 1999; 大石 2004)。これらの研究結果によって、パラサイト・シングルに対するイメージも変化し、現在では正社員になれず、結婚もできず、自立したくてもできない人々という見方がなされている(坂本 2011)。また、山田自身も後にパラサイト・シングルの変容として、同様の指摘をしている(山

¹ 本研究は、JSPS 科研費 JP25000001 の助成を受けたものです。

田 2004)。

ただ、親に甘えて自立しない人々というイメージにしる、置かれた状況ゆえに親と同居せざるをえない人々というイメージにしる、ネガティブなイメージには違いない。理由はどうであれ、結婚しておらず親と同居していること自体にネガティブなイメージがついているといえるだろう。

その理由として考えられるのは、結婚し、親元を離れてやっと一人前とみなされる価値観の存在である。かつての日本社会では人々のライフコースは標準化されており、多くの人々が正規の職に就き、結婚し、親元を離れ、子どもを産み育てるというライフイベントを 20代から 30 代の前半あたりで経験した。このとき、これらのライフイベントを経験することで一人前の「大人」とみなされる価値観が確立された (嶋崎 2008)。そして、ライフコースは個人化し (宮本 2011; 嶋崎 2013)、皆が従来の意味での「大人」になれるわけではなくなった現在においても、この「大人」像が活着しているとされている (嶋崎 2008)。それゆえに、結婚しておらず親と同居している親同居無配偶者は一人前の「大人」になれていない人々としてネガティブなイメージをもたれてしまうのだろう。

しかしながら、当の親同居無配偶者が自分自身をネガティブに捉えているかどうかはまた別問題である。現在の若年層について論じた中西新太郎によれば、従来「大人」という枠組みで現在の若年層を捉えることはできず、かれらにはかれらにとっての標準的な世界というものが存在しているという。そして、現在の若年層を理解するためには、従来「大人」という枠組みで捉えるのではなく、かれらの声を十分に聞きとることから始めなければならないとしている (中西 2009)。親同居無配偶者についても、従来「大人」という枠組みを用いてネガティブに捉えるだけでなく、かれらが自分自身をどのように捉えているのかを明らかにする必要があるだろう。参考までに、20~34 歳の親と同居している未婚者数、およびその割合をみると、この 30 年の間に数、割合ともに急増し、現在ではおよそ半数が親と同居する未婚者であることがわかる (図 1)。つまり、親と同居している未婚者という状況は決して珍しいものではなくなっている。未婚者と無配偶者はまったく同じというわけではないが、親同居無配偶者についても、その数は増えていると考えられる。であるならば、結婚もしておらず親と同居しているという状況はあたりまえの状況となり、かれら自身はネガティブに捉えていない可能性もある。そこで本稿では、親同居無配偶者の自己評価を分析し、かれらが自分自身をどのように評価しているのかを明らかにする。

また本稿では、自己評価を示す変数として生活満足度と階層帰属意識に注目する。生活満足度は主観的ウェルビーイングの指標として多くの研究で使用されている指標であり (Frey and Stutzer 2002=2005; Tran et al 2017 など)、自らがよりよい状態であるのかどうかを総合的に評価したものであるといえる。一方の階層帰属意識は自らが社会のどこに位置付けられているのかを評価する地位アイデンティティの指標として多くの研究で使用されている指標で

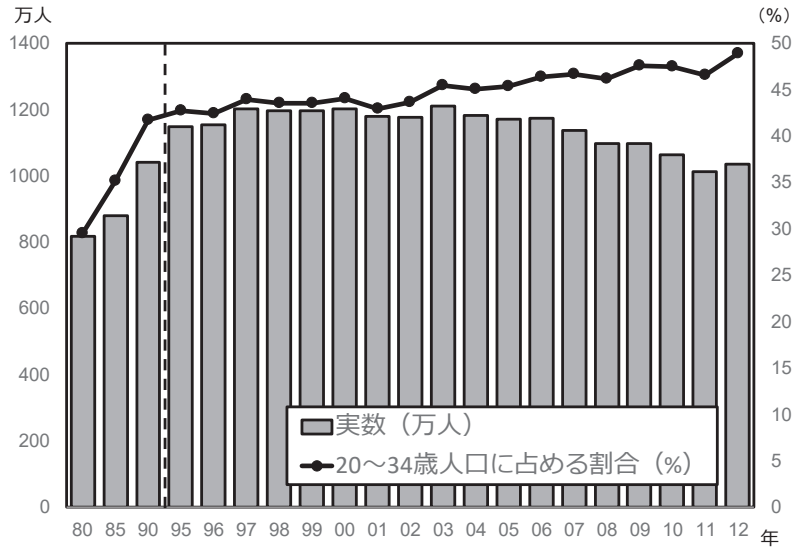


図1 親と同居する未婚者数の推移

ある（数土 2013; 吉川 2014 など）。今の生活を総合的に評価した生活満足度と、階層の上下に限定して評価した階層帰属意識という2つの自己評価から親同居無配偶者の自己評価を多角的に分析していく。

なお本稿では、学生ではない25～34歳の人々に限定し、分析を行っていく。すでに述べたように、従来のライフコースでは20代から30代前半に種々のライフイベントを経験して一人前の「大人」になっていった。かつては「大人」になっていたはずの年齢層で親同居無配偶者であることが、かれらの自己評価を下げているのかどうかを検証する。上限を34歳に設定したのは、壮中年層における親同居無配偶者の場合、親の介護等の問題もあられ、別の分析視角が必要となるためである²。また、下限を25歳に設定したのは、20代前半では大学などに通っている学生が多く、学生を分析から除外した場合、分析対象に学校を早くに卒業した人々を多く含んでしまう問題があるためである。

2. ステイキッズとブーメランキッズ

上記の目的に加えて、本稿ではさらに一步踏み込んだ分析を行う。というのも、親同居無配偶者と一口にいってもその内実は多様であり、親同居無配偶者の中にも差異が存在する。本稿では親同居無配偶者の中にある差異のうち、離家経験の有無に注目していく。

従来のライフコースでは「大人」への移行は不可逆的に行われていた。すなわち、正規の職に就く、結婚する、親元を離れるというライフイベントは、一度経験すれば基本的に元の状態に戻ることはなかった。しかしながら、現在ではライフコースが可逆的なものとなり、上記のライフイベントを一度経験したとしても元の状態に戻るが増えている。Walther

² 2000年代以降、34歳までを若年層として定義することが多い（Toivonen 2011=2013）ことも理由の1つである。

らは、「大人」への移行が進んだり戻ったりする様子をヨーヨーに見立て、ヨーヨー型の移行と呼んでいる (Walther et al 2002)。

親との同居に関していえば、一度親元を離れたものの、その後独立して生活することが難しくなり、親元に戻ってくる人々が注目され、その移動の様子から「ブーメランキッズ」と呼ばれている (Newman 2012=2013; South and Lei 2015 など)。ライフコースが可逆的になった今、同じ親同居無配偶者といっても、生まれてから親元を離れたことない人々と一度は離れた後に戻ってきた人々が混在している。本稿では、親同居無配偶者を離家経験の有無で分類した分析も行う。その際、離家経験がなく生まれてからずっと親と同居している親同居無配偶者を「ステイキッズ」、離家経験があり親元に戻ってきた親同居無配偶者を「ブーメランキッズ」とする。「大人」への移行を一度は進めたにもかかわらず、また戻ってきたことが自己評価を下げているのかどうか焦点となる。

3. 方法

3.1 データと分析方法

本稿で使用するデータは 2015 年 SSM 調査データである*³。分析対象は、すでに述べたように 25~34 歳で学生ではない人々である。

分析方法は、家族形態を独立変数とし、生活満足度、階層帰属意識を従属変数とした OLS 重回帰分析である。次節で説明するように、家族形態を「有配偶者／独立無配偶者／親同居無配偶者」の 3 カテゴリ、および「有配偶者／独立無配偶者／ステイキッズ／ブーメランキッズ」の 4 カテゴリに分類し、生活満足度、階層帰属意識との関連を分析する。はじめに全対象者で分析を行う。その際、参照カテゴリは有配偶者とする。配偶者を得ることは従来の「大人」になるために必要不可欠な要素であり、その状態を達成している人々と比べて親同居無配偶者の自己評価が低いのかどうか焦点となる。次に、分析対象を無配偶者に限定して分析を行う。すなわち「独立無配偶者／親同居無配偶者」の 2 カテゴリ、および「独立無配偶者／ステイキッズ／ブーメランキッズ」の 3 カテゴリと生活満足度、階層帰属意識の関連を分析する。その際、参照カテゴリは独立無配偶者とする。配偶者がおらず従来の「大人」になれていないという点では共通しているが、その中でもさらに親と同居していることが自己評価を下げているのか焦点となる。

3.2 独立変数

まず、配偶者の有無と親との同別居によって対象者を 3 つのカテゴリに分類した。そのカテゴリとは、配偶者のいる有配偶者、無配偶者のうち父、母のどちらとも同居していない独

³ 2017 年 2 月 27 日版 (バージョン 070) のデータを用いた。

表1 家族形態の度数分布表
(左：3カテゴリ 右：4カテゴリ)

	度数	%		度数	%
有配偶者	479	54.1	有配偶者	479	54.1
独立無配偶者	94	10.6	独立無配偶者	94	10.6
親同居無配偶者	312	35.3	ステイキッズ	183	20.7
合計	885	100.0	ブーメランキッズ	129	14.6
			合計	885	100.0

立無配偶者、父、母のどちらかと同居している親同居無配偶者である。親同居無配偶者をさらに2つのカテゴリに分類する際には、離家経験のない親同居無配偶者を「ステイキッズ」、離家経験のある親同居無配偶者を「ブーメランキッズ」とする。分析では、それぞれのカテゴリをダミー変数として使用する。

3カテゴリの場合の度数分布を確認すると(表1:左)、有配偶者が54.1%、独立無配偶者が10.6%、親同居無配偶者が35.3%となっている。この結果から、配偶者の有無によって対象者が半々に分けられること、無配偶者の中では親同居無配偶者のほうが独立無配偶者よりも多いことがわかる。続いて4カテゴリの場合の度数分布を確認すると(表1:右)、35.3%いた親同居無配偶者のうち20.7%がステイキッズ、14.6%がブーメランキッズとなっている。親同居無配偶者といっても生まれてから親元を離れたことがないという人ばかりというわけではなく、一度親元を離れた後に戻ってきたという人が一定数いることがわかる。

3.3 従属変数

生活満足度は生活全般に対して満足しているかどうかを尋ねた項目で、回答選択肢は「満足している/どちらかといえば満足している/どちらともいえない/どちらかといえば不満である/不満である」の5つとなっている。分析に使用する際には、「満足している」=5～「不満である」=1となるように数値を与え、数値が高いほど生活に満足していることを示すようにしている。一方、階層帰属意識は現在の日本社会を5つの層に分けたときに自分がどこに入るかを尋ねた項目で、回答選択肢は「上/中の上/中の下/下の上/下の下」の5つとなっている。分析に使用する際には、「上」=5～「下の下」=1となるように数値を与え、数値が高いほど階層帰属意識が高いことを示すようにしている。

3.4 統制変数

統制変数としては、性別、年齢、学歴、就業状態、個人収入、親の学歴、親の職業、親のくらしむき、住居を使用する。

性別は男性=0、女性=1と値を与え、年齢はサンプリング時の満年齢を使用する。就業状態

表2 従属変数と統制変数の記述統計（全対象者）

変数	割合 (%)		平均	標準偏差
性別（女性）	54.4	年齢	30.0	2.9
正規職	63.3	教育年数	13.8	2.2
非正規職	19.5	個人収入 （対数変換）	4.7	2.1
無職	17.3	親教育年数	13.3	2.2
親上層ホワイト	30.3	15歳時くらしむき	3.4	0.9
親下層ホワイト	18.2	生活満足度	4.0	1.0
親自営	18.2	階層帰属意識	3.0	0.8
親熟練ブルー	17.0			
親非熟練ブルー	16.3			
持ち家	56.8			
N	713			

表3 従属変数と統制変数の記述統計（無配偶者のみ）

変数	割合 (%)		平均	標準偏差
性別（女性）	47.3	年齢	29.1	2.8
正規職	69.5	教育年数	13.9	2.1
非正規職	21.0	個人収入 （対数変換）	5.1	1.5
無職	9.5	親教育年数	13.4	2.1
親上層ホワイト	28.6	15歳時くらしむき	3.4	0.9
親下層ホワイト	19.7	生活満足度	3.8	1.1
親自営	18.7	階層帰属意識	3.0	0.9
親熟練ブルー	15.2			
親非熟練ブルー	17.8			
持ち家	67.0			
N	315			

については従業上の地位を「正規職／非正規職／無職」の3カテゴリに分類し、それぞれダミー変数を作成した。参照カテゴリは「正規職」である*⁴。個人収入は、対数変換を施したものを使用する。親の学歴については、父親と母親のうち、より長いほうの教育年数を親教育年数として使用する。親の職業については、本人が15歳の父親と母親の職業を比べてより優位であると考えられるほうの職業を使用する*⁵。職業分類にはEGP階級分類(Erikson and

⁴ 「正規職」には「経営者・役員」「常時雇用されている一般授業者」「自営業主、自由業者」「家族従業者」が含まれている。若年層では、「経営者、役員」「自営業主、自由業者」「家族従業者」の人数が少ないために1つのカテゴリに集約した。

⁵ 白波瀬（1998, 1999）を参考とし以下の手順で父親と母親のどちらが優位かを決定した。まずそれぞれの就業状態を確認する。そして「正規職」>「非正規職」>「無職」の順で

Goldthorpe 1992) をもとに、「上層ホワイトカラー」「下層ホワイトカラー」「自営」「熟練ブルー」「非熟練ブルー・農業」「無職」の6カテゴリに分類した。その際、親が「無職」に分類される対象者はごくわずかであり、1つのカテゴリを形成するのは困難であったため、やむをえず今回は分析から除いている。参照カテゴリは「上層ホワイトカラー」である。親のくらしむきについては、直接親のくらしむきを尋ねた項目がないため、15歳時のくらしむきを代理変数として使用する。最後に、住居については、持ち家以外=0、持ち家=1を与えた「持ち家ダミー」を使用する。従属変数と統制変数の記述統計については、対象者全員のものを表2、無配偶者に限定したものを表3に示している。

4. 分析結果

4.1 全対象者の分析結果

本節では全対象者を分析した結果を確認する。

まず生活満足度を従属変数とした OLS 重回帰分析の結果が表4である。

家族形態を3カテゴリとしたときの結果をみると(表4:左)、調整済み決定係数 R^2 値は.097(1%水準で有意)であった。家族形態に注目すると、独立無配偶者($B=-.486^{**}$)と親同居無配偶者($B=-.450^{**}$)に有意な結果がみられた。回帰係数はともに負の値となっていることから、有配偶者と比べて独立無配偶者、親同居無配偶者の生活満足度が低いことがわかる。続いて家族形態を4カテゴリとしたときの結果をみると(表4:右)、調整済み決定係数 R^2 値は.099(1%水準で有意)であった。家族形態については、独立無配偶者($B=-.488^{**}$)とステイキッズ($B=-.362^{**}$)、ブーメランキッズ($B=-.564^{**}$)のすべてに有意な結果がみられた。回帰係数はすべて負の値となっており、有配偶者と比べて独立無配偶者、ステイキッズ、ブーメランキッズの生活満足度が低いことがわかる。以上の結果からは、生活満足度にかんしては配偶者の有無が重要な分断線となっていることがわかる。配偶者のいる人ほど日々の生活に満足しているという結果はこれまでも繰り返し報告されており(Frey and Stutzer 2002=2005; 脇田 2014 など)、本稿の分析もこの結果を再確認するものとなった。

次に階層帰属意識を従属変数とした OLS 重回帰分析の結果が表5である。

家族形態を3カテゴリとしたときの結果をみると(表5:左)、調整済み決定係数 R^2

大きいほうの EGP 分類を採用する。就業状態が同じ場合には「上層ホワイトカラー」>「下層ホワイトカラー」>「自営」>「熟練ブルー」>「非熟練ブルー・農業」の順でより大きいほうの EGP 分類を採用した。

また、本来ならば、現在の親の職業を使用すべきであるが、2015年SSM調査では、現在の親の職業を尋ねる質問項目が含まれていない。父親にかんしては15歳時の職業と主な職業を尋ねているが、母親については15歳時の職業しか訪ねていないため、今回は15歳時の親の職業を親の職業として使用した。ただし、対象者の年齢が25~34歳であることから、15歳時の親の職業と現在の親の職業との間にはそこまで大きなズレはないと考えている。

表4 全対象者における生活満足度の規定要因
(左：家族形態3カテゴリ 右：家族形態4カテゴリ)

	B	SE	β		B	SE	β
定数	3.295 **	.562		定数	3.264 **	.561	
性別 (ref:男性)	.251 **	.080	.128	性別 (ref:男性)	.255 **	.080	.130
年齢	-.023	.013	-.067	年齢	-.023	.013	-.067
教育年数	.053 **	.019	.117	教育年数	.057 **	.019	.126
正規職 (ref)				正規職 (ref)			
非正規職	-.249 *	.100	-.101	非正規職	-.253 *	.100	-.102
無職	-.050	.196	-.019	無職	-.053	.196	-.021
個人収入 (対数変換)	.048	.036	.101	個人収入 (対数変換)	.049	.036	.102
親教育年数	.005	.020	.012	親教育年数	.004	.020	.009
親上層ホワイト (ref)				親上層ホワイト (ref)			
親下層ホワイト	-.097	.109	-.038	親下層ホワイト	-.093	.109	-.037
親自営	-.129	.109	-.051	親自営	-.124	.109	-.049
親熟練ブルー	-.082	.117	-.031	親熟練ブルー	-.081	.117	-.031
親非熟練ブルー	.011	.120	.004	親非熟練ブルー	-.002	.120	-.001
15歳時くらしむき	.144 **	.043	.125	15歳時くらしむき	.143 **	.043	.124
持ち家	.138	.082	.069	持ち家	.135	.082	.068
有配偶者 (ref)				有配偶者 (ref)			
独立無配偶者	-.486 **	.129	-.148	独立無配偶者	-.488 **	.129	-.149
親同居無配偶者	-.450 **	.087	-.218	ステイキッズ	-.362 **	.102	-.146
調整済みR ²		.097**		ブーメランキッズ	-.564 **	.111	-.205
N		713		調整済みR ²		.099**	

注1) B: 偏回帰係数, SE: 標準誤差, β : 標準化偏回帰係数

注2) * p<0.05, ** p<0.01

注1) B: 偏回帰係数, SE: 標準誤差, β : 標準化偏回帰係数

注2) * p<0.05, ** p<0.01

値は.165 (1%水準で有意)であった。家族形態に注目すると、親同居無配偶者にのみ有意な結果がみられた (B=-.154**)。回帰係数が負の値となっていることから、有配偶者と比べて親同居無配偶者の階層帰属意識が低いことがわかる。独立無配偶者には有意な結果がでていないことから、有配偶者と独立無配偶者の間には階層帰属意識の差はあるとはいえない。続いて家族形態を4カテゴリとしたときの結果をみると (表5: 右)、調整済み決定係数R²値は.167 (1%水準で有意)であった。家族形態については、ブーメランキッズにのみ有意な結果がみられた (B=-.253**)。やはり回帰係数が負の値となっていることから、有配偶者と比べてブーメランキッズの階層帰属意識が低いことがわかる。以上の結果からは、有配偶者と比べて親同居無配偶者の階層帰属意識が低くなっているが、この結果は主にブーメランキッズの階層帰属意識が低いことに起因していることがわかる。

4.2 無配偶者のみの分析結果

本節では分析対象を無配偶者のみに限定して分析した結果を確認する。

まず生活満足度を従属変数としたOLS重回帰分析の結果が表6である。

家族形態を2カテゴリとしたときの結果をみると (表6: 左)、調整済み決定係数R²

表5 全対象者における階層帰属意識の規定要因
(左：家族形態3カテゴリ 右：家族形態4カテゴリ)

	B	SE	β		B	SE	β
定数	0.479	.446		定数	0.451	.445	
性別 (ref:男性)	.331 **	.064	.204	性別 (ref:男性)	.334 **	.064	.206
年齢	-.001	.010	-.003	年齢	-.001	.010	-.003
教育年数	.075 **	.015	.200	教育年数	.078 **	.015	.209
正規職 (ref)				正規職 (ref)			
非正規職	-.282 **	.079	-.138	非正規職	-.285 **	.079	-.140
無職	.227	.156	.106	無職	.224	.156	.105
個人収入 (対数変換)	.088 **	.029	.224	個人収入 (対数変換)	.089 **	.029	.225
親教育年数	.025	.016	.066	親教育年数	.024	.016	.064
親上層ホワイト (ref)				親上層ホワイト (ref)			
親下層ホワイト	-.037	.087	-.018	親下層ホワイト	-.034	.086	-.016
親自営	.003	.087	.002	親自営	.008	.087	.004
親熟練ブルー	-.087	.093	-.040	親熟練ブルー	-.087	.093	-.040
親非熟練ブルー	.029	.096	.013	親非熟練ブルー	.019	.096	.009
15歳時くらしむき	.171 **	.034	.180	15歳時くらしむき	.170 **	.034	.179
持ち家	.192 **	.065	.117	持ち家	.190 **	.065	.116
有配偶者 (ref)				有配偶者 (ref)			
独立無配偶者	-.046	.103	-.017	独立無配偶者	-.049	.103	-.018
親同居無配偶者	-.154 *	.069	-.090	ステイキッズ	-.078	.081	-.038
調整済みR ²		.165**		ブーメランキッズ	-.253 **	.088	-.111
N		713		調整済みR ²		.167**	
				N		713	

注1) B:偏回帰係数, SE:標準誤差, β :標準化偏回帰係数

注2) * p<0.05, ** p<0.01

注1) B:偏回帰係数, SE:標準誤差, β :標準化偏回帰係数

注2) * p<0.05, ** p<0.01

値は.166 (1%水準で有意)であった。家族形態に注目すると、親同居無配偶者に有意な結果はでていない。すなわち、独立無配偶者と親同居無配偶者の間に生活満足度の差があるとはいえない。続いて家族形態を3カテゴリとしたときの結果をみると (表6:右)、調整済み決定係数 R²値は.172 (1%水準で有意)であった。家族形態についてはステイキッズにのみ有意な結果がみられた (B=.427**)。回帰係数が正の値となっていることから、独立無配偶者と比べてステイキッズの生活満足度が高いことがわかる。ブーメランキッズには有意な結果がでていないことから、独立無配偶者とブーメランキッズの間には生活満足度の差があるとはいえない。2カテゴリの分析結果で親同居無配偶者に有意な結果がでなかったのは、以上のようなステイキッズの結果とブーメランキッズの結果が混じっていたためだと考えられる。次に階層帰属意識を従属変数とした OLS 重回帰分析の結果が表7である。

家族形態を2カテゴリとしたときの結果をみると (表7:左)、調整済み決定係数 R²値は.155 (1%水準で有意)であった。家族形態に注目すると、親同居無配偶者に有意な結果はでていない。また家族形態を3カテゴリとしたときの結果をみると (表7:右)、調整済み決定係数 R²値は.160 (1%水準で有意)であった。家族形態については、こちらも有意な

表 6 無配偶者における生活満足度の規定要因
(左：家族形態 2 カテゴリー 右：家族形態 3 カテゴリー)

	B	SE	β		B	SE	β
定数	1.368	.910		定数	1.227	.910	
性別 (ref:男性)	.265 *	.113	.125	性別 (ref:男性)	.271 *	.112	.128
年齢	-.023	.020	-.061	年齢	-.023	.020	-.060
教育年数	.020	.031	.041	教育年数	.031	.031	.063
正規職 (ref)				正規職 (ref)			
非正規職	-.189	.143	-.073	非正規職	-.198	.143	-.076
無職	-.060	.285	-.017	無職	-.067	.284	-.019
個人収入 (対数変換)	.171 **	.058	.238	個人収入 (対数変換)	.173 **	.058	.241
親教育年数	.027	.032	.055	親教育年数	.024	.032	.050
親上層ホワイト (ref)				親上層ホワイト (ref)			
親下層ホワイト	.242	.173	.091	親下層ホワイト	.255	.173	.096
親自営	-.105	.171	-.039	親自営	-.088	.171	-.033
親熟練ブルー	.012	.197	.004	親熟練ブルー	.019	.196	.006
親非熟練ブルー	.144	.194	.052	親非熟練ブルー	.120	.194	.043
15歳時くらしむき	.385 **	.066	.310	15歳時くらしむき	.383 **	.066	.309
持ち家	-.125	.170	-.056	持ち家	-.145	.170	-.065
独立無配偶者 (ref)				独立無配偶者 (ref)			
親同居無配偶者	.303	.196	.120	ステイキッズ	.427 *	.207	.201
調整済みR ²		.166**		ブーメランキッズ	.193	.204	.086
N		315		調整済みR ²		.172**	
				N		315	

注1) B: 偏回帰係数, SE: 標準誤差, β : 標準化偏回帰係数

注2) * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

注1) B: 偏回帰係数, SE: 標準誤差, β : 標準化偏回帰係数

注2) * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

結果はでていない*⁶。以上の結果からは、無配偶者に限定した場合、家族形態によって階層帰属意識に違いがあるとはいえないことがわかる。

5. 親同居無配偶者の複雑な自己評価

分析の結果を大きくまとめるならば、親同居無配偶者の自己評価は低いということができる。しかし、その内実はそう単純ではない。

まず生活満足度については、親同居無配偶者であることというよりも配偶者のいないことによって生活満足度が低くなっており、親と同居していることは生活満足度を下げるとはいえない。むしろ、無配偶者に限定し、また親同居無配偶者をステイキッズとブーメランキッズに分けてみると、独立無配偶者よりもステイキッズの生活満足度が高いという結果がでてくる。ステイキッズの生活満足度が独立無配偶者よりも高くなっているのは、親元に留まることによって生活水準を下げずに済むからかもしれない。他方、ブーメランキッズについて

⁶ ステイキッズとブーメランキッズの回帰係数をみてもみると、符号が反対になっている。そこで、ステイキッズを参照カテゴリとした分析を試みたが (図表省略)、ステイキッズとブーメランキッズの間に有意な差はなかった。

表7 無配偶者における階層帰属意識の規定要因
(左：家族形態2カテゴリ 右：家族形態3カテゴリ)

	B	SE	β		B	SE	β
定数	0.682	.773		定数	0.575	.774	
性別 (ref:男性)	.215 *	.096	.120	性別 (ref:男性)	.219 *	.095	.123
年齢	-.010	.017	-.032	年齢	-.010	.017	-.031
教育年数	.049	.026	.117	教育年数	.057 *	.027	.138
正規職 (ref)				正規職 (ref)			
非正規職	-.351 **	.122	-.160	非正規職	-.358 **	.122	-.163
無職	.059	.242	.019	無職	.053	.241	.018
個人収入 (対数変換)	.108 *	.049	.177	個人収入 (対数変換)	.109 *	.049	.180
親教育年数	.023	.027	.054	親教育年数	.020	.027	.049
親上層ホワイト (ref)				親上層ホワイト (ref)			
親下層ホワイト	.094	.147	.042	親下層ホワイト	.104	.147	.047
親自営	-.066	.145	-.029	親自営	-.053	.145	-.023
親熟練ブルー	-.068	.167	-.027	親熟練ブルー	-.063	.167	-.025
親非熟練ブルー	.034	.165	.015	親非熟練ブルー	.016	.165	.007
15歳時くらしむき	.282 **	.056	.270	15歳時くらしむき	.281 **	.056	.269
持ち家	.056	.144	.029	持ち家	.040	.144	.021
独立無配偶者 (ref)				独立無配偶者 (ref)			
親同居無配偶者	.012	.166	.006	ステイキッズ	.107	.176	.060
調整済みR ²		.155**		ブーメランキッズ	-.072	.174	-.038
N		315		調整済みR ²		.160**	
				N		315	

注1) B: 偏回帰係数, SE: 標準誤差, β: 標準化偏回帰係数

注2) * p<0.05, ** p<0.01

注1) B: 偏回帰係数, SE: 標準誤差, β: 標準化偏回帰係数

注2) * p<0.05, ** p<0.01

は、現在は親と同居しているにもかかわらず独立無配偶者との間に有意な差がない。一度親元を離れたにもかかわらず再び親元に戻ってきたという事実が独立無配偶者よりも生活満足度を高める効果を弱めている可能性がある。

次に階層帰属意識にかんしては、有配偶者と独立無配偶者の間に有意な差がみられず、親同居無配偶者にだけ有意な結果がみられた。このことから、親同居無配偶者であることが階層帰属意識を下げているといえる。しかしながら親同居無配偶者をステイキッズとブーメランキッズに分けて分析すると、ブーメランキッズにのみ有意な結果がみられ、ステイキッズには有意な結果はみられなかった。このことから、一度親元を離れたにもかかわらず、再び親元に戻ってきたという事実がかれらの階層帰属意識を下げているといえる⁷。「大人」への移行が可逆的になり、直線的なライフコースを歩む人々が減った現在でも、親元へ戻ってくることに對して「出戻り」といったネガティブなイメージが存在していることが示唆される。

以上の議論をまとめると、親同居無配偶者の自己評価は低いといえるが、正確にいうと、生活満足度にかんしては配偶者のいないことが生活満足度を下げており、階層帰属意識につ

⁷ ただし、無配偶者に限定した分析では有意な結果はでておらず、あくまで有配偶と比べた場合にブーメランキッズの階層帰属意識が低いということである。

いては離家した後に親元へ戻ってくるのが階層帰属意識を下げているということができる。
最後に本稿の限界について述べる。

まず、本稿では世帯収入や現在のくらしむきについての変数を使用していない。世帯収入については、親同居無配偶者の多くが「わからない」と回答しており、使用できなかった。その際、主観的なくらしむきを代わりに使用するという方策が考えられるが、2015年SSM調査にはそのような変数が含まれていないため使用できなかった。自己評価と独立無配偶者、ステイキッズ、ブーメランキッズの関連を分析するには現在のくらしむきが重要な変数であると考えられるため、今後の課題としたい。

また、本稿ではブーメランキッズがどういった経緯で親元に戻ってきたのかという点については分析していない。さらにブーメランキッズの階層帰属意識がなぜ低いのかについては、推測段階に留まっている。今後は、ブーメランキッズとはどういった人々なのか、かれらが自分自身のライフコースについてどのように考えているのかなどについて研究していく必要があるだろう。

[文献]

Erikson, R., and J H. Goldthorpe, 1992, *The Constant Flux: A Study of Class Mobility in Industrial Societies*, Oxford University Press.

Frey, B. S. and A. Stutzer, 2002, *Happiness and Economics: How the Economy and Institutions Affect Well-being*, Princeton University Press. (=2005, 佐和隆光監訳・沢崎冬日訳『幸福の政治経済学：人々の幸せを促進するものは何か』ダイヤモンド社.)

岩上真珠, 1999, 「20代、30代未婚者の親との同別居構造：第11回出生動向基本調査独身者調査より」『人口問題研究』55(4): 1-15.

吉川徹, 2014, 『現代日本の「社会の心」：計量社会意識論』有斐閣.

宮本みち子, 2011, 「少子・高齢社会のライフコース」宮本みち子編『人口減少社会のライフスタイル』放送大学教育振興会, 73-90.

中西新太郎, 2009, 「漂流者から航海者へ：ノンエリート青年の〈労働—生活〉経験を読み直す」中西新太郎・高山智樹編『ノンエリート青年の社会空間：働くこと、生きること、「大人になる」ということ』大月書店, 1-45.

Newman, K S., 2012, *The Accordion Family: Boomerang Kids, Anxious Parents, and the Private Toll of Global Competition*, Beacon Press. (=2013, 萩原久美子・桑島薫『親元暮らしという戦略：アコーディオン・ファミリーの時代』岩波書店.)

西文彦, 2015, 「親と同居の未婚者の最近の状況 その10」, (2018年1月29日取得, <http://www.stat.go.jp/training/2kenkyu/pdf/zuhyou/parasi10.pdf>).

大石亜希子, 2004, 「若年就業と親との同別居」『人口問題研究』60(2): 19-31.

- 坂本和靖, 2011, 「パラサイト・シングル：親同居未婚者が抱える問題」『日本労働研究雑誌』 53(4): 10-3.
- 嶋崎尚子, 2008, 『ライフコースの社会学』学文社.
- 嶋崎尚子, 2013, 「『人生の多様化』とライフコース：日本における制度化・標準化・個人化」
田中洋美・M. ゴツィック・K. 岩田ワイケナント編『ライフコース選択のゆくえ：日本とドイツの仕事・家族・住まい』新曜社, 2-22.
- 白波瀬佐和子, 1998, 「階級構造と女性：英国との比較を通じて」盛山和夫・今田幸子編『1995年 SSM 調査シリーズ 12 女性のキャリア構造とその変化』1995年 SSM 調査研究会, 75-89.
- 白波瀬佐和子, 1999, 「世代間移動の男女比較：国際比較の視点から」『社会学評論』50(1): 41-58.
- South, S. J., and Lei, L., 2015, “Failures-to-Launch and Boomerang Kids: Contemporary Determinants of Leaving and Returning to the Parental Home,” *Social Forces*, 94(2), 863-90.
- 数土直紀, 2013, 『信頼にいたらない世界：権威主義から公正へ』勁草書房.
- Toivonen, T., 2011, “NEETs: The Strategy within the Category,” Goodman, R., Imoto, Y. and Toivonen, T. eds, *A Sociology of Japanese Youth*, Routledge (=2013, 井本由紀監訳, 西川美樹訳「ニート：カテゴリーの戦略」ロジャー・グッドマン／井本由紀／トゥーッカ・トイボネン編『若者問題の社会学：視線と射程』明石書店, 251-283.)
- Tran, T. Q., Thanh, Q. N., Huong V. V., and Tinh, T. D., 2017, “Religiosity and Subjective Well-Being Among Old People: Evidence from a Transitional Country,” *Applied Research in Quality of Life*, 12(4), 947-62.
- 脇田彩, 2014, 「生活満足度と婚姻状況・就業状況との関連における男女差」『東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズ』78.
- Walther, Andreas, Barbara Stauber, Andy Biggart, Manuela du Bois-Reymond, Andy Furlong, Andreu López Blasco, Sven Mørch and José Machado Pais ed., 2002, *Misleading Trajectories: Integration Policies for Young Adults in Europe?*, Leske+Budrich.
- 山田昌弘, 1999, 『パラサイト・シングルの時代』筑摩書房.
- 山田昌弘, 2004, 『パラサイト社会のゆくえ：データで読み解く日本の家族』筑摩書房.

Self-evaluation of Singles Living with Their Parents

Ryotaro Hazama
(Osaka University)

Abstract

This study attempts to ascertain the life satisfaction of singles living with their parents through self-evaluation.

People have a negative image of singles who live with their parents wherein they still depend on their parents. However, we do not know how such singles evaluate themselves. Therefore, this study uses life satisfaction and status identification as variables in a self-evaluation of such singles. “Life satisfaction” in this study means an evaluation of life overall, and “status identification” means an evaluation of their position in the class structure. In addition, this study pays attention to whether singles living with their parents have previously left their parents. This study refers to singles who have never left their parents as “staying kids” and those who have left their parents and have now returned as “boomerang kids.” This study compares a self-evaluation of married people, singles living alone, staying kids and boomerang kids.

The results indicate that married people are more satisfied than singles both living alone and living with their parents. Singles living with their parents also have lower status identification than married people. Boomerang kids in particular have lower status identification than married people. From the above, this study reveals the following two points: (1) singles living with their parents are less satisfied, and (2) the fact that they returned to their parents’ homes lowers their status identification.

Keywords: Singles living with their parents, life satisfaction, status identification